

好評発売中!



続日本100名城 166 宇陀松山城

14世紀半ば頃に宇陀三将の秋山氏により築城。天正13年(1585)の豊臣秀長の太閤入城に伴い、秋山氏が城から退去し、以後伊藤義之、加藤光泰、羽田正親、多賀秀種らの居城となった。発掘調査で、中枢部から多賀氏の家紋瓦が出土し、多賀秀種による大改修が推定され、高取城と共に、重要拠点であったことが窺える。関ヶ原合戦後、西軍に属した多賀氏に代わり、福島高晴が入城し大改修を施すが、大坂夏の陣で豊臣方との内通を疑われ改易。元和元年(1615)、城割が実施され廃城となった。

所在地	奈良県宇陀市大字宇陀春日・拾生・石清水
別名	秋山城
築城年代	南北朝期(豊臣配下の天正13年(1585)以降に改修)
築城者	秋山氏
主要城主	伊藤氏、加藤氏、羽田氏、多賀氏、福島氏
指定文化財	国指定史跡
現存建造物	—
再建建造物	—

南東虎口部大門跡

中枢部は、主郭部(本丸・天守郭)と二の丸で構成され、その外側下を壇状に外縁部の郭群が取り囲む。文禄3年(1594)『阿紀山城図』(字本)に大門と記される南東虎口には、城域東側から二ノ丸裾を廻る通路が集まっていた。この門は二ノ丸から中枢部へと至る門で、櫓門が想定されている。門の左右に張り出すように櫓が突出し、門に迫る敵方に横矢を掛ける構造だ。大門は、東西櫓台間で間口76m、主柱間で54m、奥行32mの規模であった。

(城) ©(公財)日本城郭協会

希望小売価格

350円(税込)

続日本100名城